
空の欠片

やしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の欠片

【Nコード】

N74660

【作者名】

やしろ

【あらすじ】

クラスで浮いている千晴と、要領が良くて友だちの多い葉月。一人でも前を向けますか？周りにだれかいないと不安ですか？この正反対の二人が主役を交代しながら少しずつ関係を変化させていく話です。

走馬灯は嘘をつく

走馬灯、という現象がある。死ぬ間際の一瞬に、今までの人生がエキシビションのように再生される。いいところだけ、もしくはあまりいい出来ごとじゃなかったけど、ふりかえってみればいい思い出かな、と思える場面が。

私は今まで死んだ経験がないので、当然走馬灯が見えたことはなかったけれど、今、この瞬間に、一三年分の人生を編集した映像が頭の中を駆け巡っている。

八歳のときの誕生日に、初めて友だちから誕生日プレゼントをもらったこと。六色セツトの色ペンだった。嬉しくて、泣いちゃったんだっけ。もったいなくて使えなくて、今でも大切にしまっている。どこにしまっているのか、ちゃんと覚えている。

遠足の自由行動のときに、友だちと二人ではぐれてしまったこと。原っぱのある大きな自然公園で、散歩しているうちにハイキングコースを外れてしまったんだっけ。怖くて、不安で、もう帰れないよな気がして、とにかく泣いた。その間中、友だちが手をつないでいてくれた。大丈夫、帰れるよ、と言い続けてくれた。その後、血眼で搜索してくれた先生に見つけてもらって、合流することができた。カミナリが落ちるなんて表現じゃ申し訳ないくらい、とにかくすごい勢いで怒られた。

夏休みの宿題で描いた絵が知らないうちにコンテストに出されたとかで、賞をとったこと。全然目立たない私が、なぜか全校生徒の前で賞状とトロフィーを渡されることになってしまった。緊張や、全校生徒に観察されているという事実による恐怖でガチガチに震えている私を、友だちが励ましてくれたこと。きれいな絵なんだから賞

とれたんだよ、自信持ちなつて。そう言ってくれて、私は背中を向けて、少し泣いた。このことはその子には秘密だ。

担任の先生が大げさに喜んで、絵は教室に飾られて、翌日びりびりに破かれていた。驚いたし、ショックだったけど、友だちの方が私より怒つて、気にかけてくれた。だから、別にいいかな、と思う。

破かれたつてことは、やっぱり下手だったつてことだし。でも、せっかく友だちが褒めてくれたのに、と思うと、少し惜しい気はする。

友だちが、友だちと、友だちに。

私の走馬灯は、とにかくその「友だち」一色で、そのどれもが、本当にビデオで撮つたみたいに鮮明で、そのときの感情は日記につけるよりもリアルに蘇る。

まるで、今垂れ流しになっている記憶の方が現実で、聞いた言葉が儚い夢であるみたいに。

「別に、千晴とは仲いいわけじゃないよ。ただ、小学校が同じだったっただけ」

教室に忘れ物を取りに来た。宿題のプリント。引き出しに突っこんだままだったことを思い出して。時間は放課後。茜色の夕日がきれい。春の日ざしって暖かいな。そこまでは、ちゃんと覚えてる。

でも、閉じた引き戸に手を添えかけた瞬間に、すべての機能が止まった。

私のなかで働くのは、聴覚だけ。ただ、薄い扉の向こう側の会話を聞くためだけに、自分のすべてが集中していく。

「だってさあ、葉月、瀬川とくつついてること多くない？」

「私も、よく見るけどなあ、二人が一緒にいるところ」

「違つて。勝手に付いてきちゃうんだつて。ほら、あの子、友だちいないからさ」

千晴とは仲いいわけじゃないよ。

小学校が同じだったっただけ。

聴覚が仕事をやめる。五感は完全にストライキ。そして、流れる走馬灯。

流れていく記憶をたどりながら、葉月ちゃんが私の中のこんなにも大きな部位を占めていたのか、とぼんやりと思った。

友だち、なんて単語は葉月ちゃんにしか使ってこなかったな、はは。そういえば、私、何かあるといつも葉月ちゃんと一緒に行動してたっけ。遠足のバスでは必ず隣に座って。学校の帰り道は二人で道草するのが日課で。

勝手に付いてきちゃうんだって。

そっか、迷惑だったんだ。私一人だけ友だちだと、向こうも私のことを大事に思ってくれていたんだと、勘違いしていただけだったんだね。

あの子、友だちいないから。

葉月ちゃんは、私を友だちとは思っていなかったんだね。

走馬灯は徐々にぼやけ、少しずつ感覚が戻ってくる。

入れ替わりに、教室の内側の女の子たちの笑い声が輪郭を持ち始める。楽しそう。愉快でたまらないって感じ。

あの声の塊のなかに、葉月ちゃんがいて、同じ感情で笑っているんだ。

そう考えると、はつきりしだしたはずの視界がにじんでぼやけてくる。

やっぱり、私と葉月ちゃんは友だちじゃない。

だって、葉月ちゃんと同じ感情で笑えない。正反対の感情に、無様にかき乱されている。

薄い扉一枚、隔てただけなのに。

手をかけて、スライドさせれば扉は開く。隔てるものはなくなる。たいして難しいことじゃない。

でも、とうとう引き戸に手を触れることができなかった。

同じ場所には行けないと思った。

それが、今の私たちの正確な距離。

そう思うと、少し笑えた。

私に都合よく編集された記憶と、1歩踏み出すこともできない現実。なんて滑稽なんだろう。なんて鈍感だったんだろう。

扉に背を向け、もと来た道へと引き返す。

体は、小刻みに震える。

自分を笑った。無知で、幼くて、無邪気だった私を笑った。

笑うたびに涙でにじんでいく視界。

目に映るものはみんなぼやけている。

ただ一つ、私の中ではつきりしていることは、葉月ちゃんの言葉だった。

千晴とは仲いいわけじゃないよ。

春の夕暮れ時は、まだ寒い。

こんなに寒かったのに、どうして平気でいられたんだろう。

一人ぼっちって、こんなに寒いことだったんだ。

流れてくる涙だけは暖かくて、それがすごく腹立たしくて、私は泣いた。

走馬灯は終わった。

私のなかの、何かが死んだ。

走馬灯は嘘をつく（後書き）

まだ途中です。次は、作中の葉月が主役になります。感想いただきます。よろしくお願いします。

かくれんぼ（前書き）

今回は、葉月が主役です。

かくれんぼ

一人は寒い。そう思う。

昔、まだランドセルに着られているって表現がしつくりくるくらい前のことだけど、手をこすり合わせながら、たしかにそう思ったのだ。

みなでかくれんぼしていて、私はオニから隠れながら、それでも探し出してくれるのを待っていた。

もういいかい。まだだよ。

もういいかい。もういいよ。

もういいよ。探しに来て。見つけ出して。待ってるんだよ。

そのうち、もういいかい、が聞こえなくなつて、誰の声もしなくなつた。

どうして誰も私を見つけてくれないんだろう。

答えは簡単だ。私が隠れるのがうまかったから。みんな、私の隠れ場がわからなかったから。

だから、私の勝ちだ。

優越感に高揚したのも最初だけで、どんどん暗くなつていく空を見上げながら手をこすらせた。

寒い。探しに来て。

寒い。見つけ出して。

寒い。待ってるんだよ。

私のこと、ほんとうは忘れちゃってるんじゃないの？

寒い。

私の居場所がわからないのは、私がみんなの一步先をいつているから。私が、みんなよりも賢いから。

そう自分に言い聞かせて、私は寒さをこらえきれずに肩を抱いた。ほんとうは、みんな私のことなんてどうでもよくて、探し出そうなんて思わなくて、いないことに気がつかなくて帰ってしまったのか

もしれない。
確かめに行く勇氣は、なかった。

○

「葉月ってさあ、瀬川と仲いいわけ？」

その言葉の含んだ毒の多さに驚いてしまって、すぐには答えが返せなかった。

私のリアクションをどうとつたのか、美奈は意味ありげに続ける。

「や、別に責めてるわけじゃないよ？たださあ、瀬川ってほら、あれじゃん。教室片隅系？葉月が仲いいとかすごい意外っていうか」

口元に嫌な笑いを浮かべて、美奈は、ねえ？と他の女子に目を配る。背筋が寒くなった。緊張した。

答え次第では、私はこの輪の中から追放されるだろう。

「私たち、ほら、小学校同じだったからさ」

事実だけを言つて、核心は突かなかった。

千晴とは、小学生時代の一番の友だちだった。それを認める気持ちはある。

でも、今は違う。一番じゃない。千晴意外の人が、私にはたくさんいる。

一人よりも二人。もっと多く。もっと広く。それが、今の私にとって一番大切なことだった。

「だってさあ、葉月、瀬川とくつついてること多くない？」

「私も、よく見るけどなあ、二人が一緒にいるとこ」

その場にいるみんなが、さっき美奈の美奈の表情そのままに、嫌な笑顔になっていく。

はみだすよ。こいつ、これからはみだすよ。

その目の語るメッセージにぞっとした。

「違うって。勝手に付いてきちゃうんだって。ほら、あの子、友だちいないからさ」

とつさに、そう言っていた。

あの子、友だちいないから。

「やっぱりねー。葉月が瀬川なんかと仲いいわけないよね。あいつ、はつきり言って一緒にいるやつの気が知れないっていうか」

我が意を得たり、とばかりに美奈がはしゃぎだす。

「そーそー。マジ暗いもんね」

「お近づきになりたくありませんって感じ」

「うわっ、ひどっ。そこまで言っちゃう？」

「私、正直者だからさー」

「フオローになってないし」

あははは、とその場にいたみんなが笑った。私も、笑っていた。

今、私たちは一つになった。

人の集団をつなぎとめるのに必要なのは、ボンドでも縄でもない。

共通の敵。これだけだ。

私は千晴をいけにえにして、集団の内側に居座る権利を守った。

一人は寒い。二人じゃ足りない。私は、もっとたくさんの熱に囲まれていたい。

私の周りにはたくさんの人がいて、みんなが私のことを仲間だと思ってくれていている。

友だちを売った罪悪感はなかった。

一緒に笑ってくれる人がいることに、ただ安心していた。

私の血は、多分凍っている。

でも、一緒に笑うなかの誰ひとりとして、それに気がつく人はいない。

それは、私が隠すのがうまいから。

みんなより賢いから、悟られずに振舞うことができる。

みんな、私のことなんて知らない。

本当は、私に興味がないだけなのかもしれないけど、確かめる勇氣は、なかった。

かくれんぼ（後書き）

次は、千晴が主役になります。私としては、これから先どうなるのかたいへん不安であります。ちゃんと完結できるといいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7466o/>

空の欠片

2011年1月27日01時02分発行